

情報共有 本店 5/4 AMレクメモ

(6枚)

(非管理メモ)

プラント状況(本店レク) 議事メモ

日時: 平成 23 年 5 月 4 日 (火) 11:00~12:00

場所: 東京電力本館 3 階 ABC 会議室

先方: 記者約 40 名 (カメラ 5 台)

当方: 原子力・立地本部

原子力設備管理部

原子力・立地業務部

本店広報部

配布資料:

- ・ 東北地方太平洋沖地震による影響などについて【5月4日 午前9時現在】
- ・ 福島第一原子力発電所 プラント関連パラメータ
- ・ 福島第一原子力発電所モニタリングカーによる計測状況 等
- ・ 集中廃棄物処理施設周辺 サブドレン水核種分析結果 (5/4 現在)
- ・ 福島第一原子力発電所 1 号機 原子炉建屋内の作業環境改善に関する報告徴収について
- ・ T/B排水管理 (タービン建屋水位)
- ・ 排出基準を超える放射線レベルの廃液の海洋放出について (4月4日の報告書)

質疑:

Q. RHR 代替冷却設備工事が 5 月 16 日開始と工事工程にはあるが、設置完了の見通しは。

A. 完了の目途は正確に決まっていないが、熱交換器ユニットの設置は組み立てたものを持ち込むだけであり、さほど時間はかからない。

Q. CS 系配管への注入と CCS 系配管への注入の優先順位はどちらか。

A. CS 系配管の方を優先する。CS 系の方が圧力容器の中への注水となるため。冷却効率の観点から圧力容器の中へ直接注水できる CS 系配管の方が良いと考えている。

Q. CCS 系配管への注入を採用すると、現在の圧力容器内への注入もあわせて継続するという考えでよいか。

A. 循環できるようになれば、燃料頂部まで水があるので、炉心の中に継続して注水していくのか、やめるのかは検討していく。

Q. 熱交換器ユニットの大きさはどれくらいか。

A. 大きさの詳細はわからないが、仕様としては、2.5MW 程度の熱交換の容量を予定している。流量としては、100m³/h を設計しているところである。

Q. 除熱能力は。また、どの程度まで温度を下げられるのか。

A. 熱交換器の崩壊熱としては、1.5MW 程度と聞いているので、2.5MW の容量で十分

冷やせると考えている。冷却剤の温度としては100度以下に維持できると考えている。

Q. どのくらい機器を回せば100度以下になるのか。

A. 今の段階でも十分に冷えていることは確認できているので、インサービスできれば数時間～数日で冷却できると考えている。

Q. 熱交換器ユニットの設置場所は原子炉建屋の中に入れるのか。

A. 熱交換器ユニットは大物搬入口の外側に設置予定。

Q. トレンチの埋設については本日の作業はもう始まっているか。

A. 午前中に開始しているはずである。

Q. トレンチに碎石を投入したのは4つあるトレンチの中の1つで良いか。

A. その通りである。

Q. コンクリートの投入作業としては本日で終了か。

A. 本日コンクリートを入れて、1日おいて、明後日再度入れる予定である。

Q. トレンチの残りの3つは今月中に閉塞させる予定か。

A. その通りである。

Q. 2次型の冷却ユニットの中にある冷却塔の仕様は。

A. 空冷のエアフィンクーラーのようなものである。2次系は200m³/hの流量をを設計しており、冷却塔の中にフィンのようなものが多くついており、そこをラジエーターによって温水を冷水に戻す。

Q. 1号機の2次系の冷却方式は空冷方式で決定か。

A. 今の時点ではこの方式を予定している。これを将来にわたって続けていくかはわからないが、当面はこの方式で冷却し、冷温停止にもっていききたい。

Q. このユニットは既存システムで構築するという理解で良いか。

A. 機器としては新しいものを作るが、新しい技術を取り入れるというものではない。

Q. エアフィンクーラーと熱交換器はどこメーカーか。

A. 日立GEに発注しているが、メーカーについては確認させていただく。

Q. この会見での議事録は公表しないのか。

A. 公開する予定はないが、会見の状況については、メディアを通じてお伝えいただいていると考えている。

Q. CS系の正式名称は。

A. 炉心スプレイ系である。

Q. CCS系の正式名称は。

A. 格納容器冷却スプレイ系である。

Q. AC系の正式名称は。

A. 不活性ガス系である。

Q. CS系とCCS系配管の健全かどうかの点検はどのように行うのか。

A. 配管を全域にわたってみることは難しいとは思いますが、配管をつなぐ箇所に関しては目視で異常がないことを確認したい。

Q. 配管をとりはずして、新しい配管を接続する作業に関しては、線量に問題なければ、作業はそれほど難しくはないのか。

A. その通りである。ボルトを外していらぬ配管を外し、新しい配管をつなぐというもので、特別な作業ではない。

Q. 作業をするのに必要な特殊な重機などを運ぶのは人力となるか。

A. 現在、検討中である。配管を外して、支えるものが当然必要になる。今は図面上であるが、現場の位置、配管をみて、どれが必要かを確認していく必要である。

Q. 熱交換器 100%×2 というのはどういうことか。

A. 2.5M容量が2系列あるということ。

Q. 全面マスクで入城可能なレベルはヨウ素 131 で 0.01Bq/cm³ 以下となっているのに対し、局所排風機によるヨウ素除去効果のグラフでは 0.026m³/h となっている。局所排風機を使っても全面マスクでは入城することができないと言うことか。

A. 確認させていただく。

Q. 冷却系配管をつなぐ際、汚染水や蒸気が噴き出すおそれなどはあるのか。しっかりと弁などでアイソレーションしないのか。

A. どういった水や蒸気が漏れ出るかといった可能性や周辺の線量・温度などをしっかりと確認した上で作業を実施する。また、事前にどのバルブを閉めればよいかと言ったアイソレーションについても検討していく。

Q. 2、3号機も1号機同様の作業を実施する予定と言うことで良いか。

A. 作業改善、水位計の設置、代替冷却という流れになると思うが、3号機については既に大物搬入口が開いているので作業改善の方法が変わるかもしれない。

Q. 2号機はS/Cの破損を考慮、3号機は大物搬入口が開いていることを考慮する必要があると思うが、1号機と変わる点はあるのか。

A. 2号機はS/Cの損傷を塞ぐ工事が必要と考えているが、ロボットの調査によると水が1階まで来ていないので、環境改善ができればとりあえずは中に入れるのではと考えている。なお、冠水にあたってはS/Cのグラウト工事等は必要になってく

ると考えている。3号機については、大物搬入口が開いているので、既にある程度の作業改善ができていないのではないかと考えており、局所排風機を改めて使用する必要がないのかもしれないとも考えている。

Q. 1号機に新たに熱交換機ユニット等を取り付けるにあたって不具合が生じた場合のバックアップは対策をどのように考えているのか。

A. 代替冷却中の注入系をどのように運用するかは検討しているところ。熱交換器については既にバックアップも含めて2台備えている。また、ポンプ、モーター類の予備品の確保をしている。

津波に対しては防潮堤の工事も実施している。なお、耐震力については確認が必要と考えている。

Q. 1号機の冠水に向けた増水はどのタイミングで実施するのか。

A. 水位が上昇した時の耐震の確認等がNISAから求められているので、報告書提出後、評価をいただいた上で、注水量の増加を検討してまいりたい。

Q. NISAから指示が出ている冠水に関する報告書の進捗状況は。

A. 近々提出したいと考えている。なお、冠水時の耐震性について一番の関心事と考えているが、現時点では大丈夫ではないかとの情報も確認している。

Q. 1号機の冠水について、政府関係者によると6m³/hから8m³/hに増加するとの情報があるが、事実関係は。

A. まだ決まっていない。

Q. 注水量を増やす際の水漏れの確認や耐震性の安全確認は建屋中に入らないとできないのか。

A. 現時点では解析等を中心として基準地震動で建物を揺らした時の安全性な度を確認していく。漏れの確認そのものについては、水位が上昇してから実際に建物内で確認することになる。

Q. 熱交換器は細管を通して熱交換するのか、もしくはフィン状のようなもので交換するのか。

A. チューブ状のものと思うが確認させていただく。

Q. 汚染水の海洋放出の影響の報告について延期されている理由は、モニタリング実測値とシミュレーション値が乖離していたのでやり直したいからか、もしくはただ時間がないからか。

A. 低濃度汚染水と高濃度汚染水の評価をあわせて評価していきたいとの理由である。

Q. 海への拡散のシミュレーションにおいては一般的に低濃度汚染水と高濃度汚染水を色分けして実施するものなのか。

A. シミュレーションといってもメッシュの粗さもあり、実際の海水の流動が整合していないという実態である。また、放出量や濃度については仮定の条件のもとで算出

していることもあり、現実と乖離している部分が出てきていると考えている。

Q. 5月中に冷却設備が完成する可能性はあるのか。

A. 早く安定した冷却状態に持ち込みたいと考えている。

Q. 熱交換器は100m³×2台を予定しているが、1台は予備用とのことだが、200m³/hにはしないのか。

A. 確認させていただく。

Q. 余震などで電源が落ちた場合、局所排風機の機能が停止し、R/B内の気体が外侮へ流出するリスクはないのか。

A. 局所排風機は停電すると機能は停止するが、正圧ハウスもあるので一気に抜けてくるリスクは小さいと考えている。

Q. 2号機立坑へ閉塞前にトレーサーの流入は実施しないのか。他に漏えいしている可能性があるのではないのか。

A. 現時点でにじみ出ている箇所もないので、トレーサーを入れる予定はない。仮に投入したとしてもにじみ出ている箇所現時点で確認されていないので、トレーサーを確認できるものではない。

Q. 注入流と溜まり水の量を比較すると注入量の方が多いが、他に外侮へ漏出している可能性があるのではないのか。

A. 周囲サブドレン等の監視状況、また、建屋溜まり水の水位などから見ると、漏出は確認されていない。

Q. 汚染水の漏出について目視以外の確認はしていないということか。

A. そうである。

Q. 熱交換機や窒素注入のラインは二重扉を開けっ放しで運用するのか。

A. 既に天井が空いている状況なので、二重扉を開けていく。また、今後、道すじにも示しているとおり、建屋をカバーで覆うことを検討している。

Q. 二重扉を開けっ放しにした場合の放射性物質の拡散評価はしているのか。

A. R/B内のダスト結果や換気量などから算出していく。

Q. 二重扉を開けた場合の建屋内の気体は建屋上部からすべて抜けていくということか。

A. 煙突部分から出て行くものと考えている。

Q. 67条に基づく海洋放出の報告について、報告書以上のものはNISAに話しているのか。

A. 報告書に基づいて説明している。

Q. NISAに説明したのは武藤副社長か。

A. 担当者レベルでもご説明させていただいている。

Q. 4/4にNISAから何時頃要請があり、何時頃提出したのか。

A. 4/4の15時頃、提出している。

Q. 海洋放出について報告書提出の前に最初にNISAに伝えた時間は。

A. 確認させていただく。

Q. パラメータについて過去分の訂正に時間がかかっているとのことだが、直近のものだけでもHPに上げるか、ペーパーでいただきたい。

A. HP上の修正はデータ精査を実施しているところなので時間をいただきたい。直近のものについては検討させていただく。

Q. 二重扉を開放した際の22000m³/hというのは、二重扉を開けっ放しにするとずっと出続ける値か。

A. 最初の1時間程度は22000m³/h程度で排出されるが、その後は周囲と同程度の濃度になると考えている。

以上